

---

# ある秋の神様

黒詩鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある秋の神様

### 【Nコード】

N9901N

### 【作者名】

黒詩鳥

### 【あらすじ】

秋だ！そうだ！短編書こうということで始まってしまった  
秋の短編祭り第一弾です

この作品書き上げたのが朝の5時半です  
かなり思考に疑いを持ちますがなんとか書き上げました  
どうぞ見ていってください！！

## （前書き）

どうも、こんにちわ黒詩鳥です

初めての人は初めまして！！

これから出来る限りよろしくね！！

だいぶ前に書いた短編を直すつもりで書き始めたんですが  
気づいたら全く別物になってました

予想以上に暗いお話に・・・

最初はもつと明るかったんですよ！

きつとBGMのせいですね。にとりの曲ずっと聴いてるとなんだか  
切なくなってきます

・・・ひよつとしてこれって自分だけですかね？

とりあえず少しでも楽しんでいってください！

ある秋の幻想郷

ここは、紅葉が美しく映える妖怪の山

これはそんな妖怪の山に住む二人の秋の神様の話です

穰子

「お姉ちゃん、今年も綺麗に紅葉になったね」

静葉

「そうね、紅葉も綺麗になったけど、それよりも今年も無事に作物が実ってよかったわ」

穰子

「そうだね、今年は気候が良かったから豊作だね」

まるで自分のことのように楽しく話す穰子を静葉は優しく見つめていた

静葉

「そういえば穰子、村の収穫祭に呼ばれていたんじゃないの？」

穰子

「あ、そうだった！」

どうも作物が無事に実ったことが嬉しいのか完全に忘れていたらしい

静葉

「まったく、折角呼ばれているんだから忘れずに行きなさいよ」

そんなふうにし少し寂しそうな顔をしながら注意する姉の顔をどうしたら笑わせれるか穰子は考えていた――

穰子

「そうだ！」

静葉

「いきなりどうしたのよ!？」

穰子

「ねえ、お姉ちゃんも一緒に行こうよ」

静葉

「遠慮するわ、あなたが呼ばれたんだからあなただけで行くといいわ」

お姉ちゃんが私に対して嘘をついているのは分かっていた、だがこの強情な姉をどうすれば私は説得するのかその手段を私は持ってなかった

穰子

「・・・・・・・・」

穰子は自分が情けなくなった

私たち神に肉親という表現も可笑しいかもしれないが今、目の前で

寂しい顔をしながらもそれを悟られまいと必死になっている唯一の肉親である彼女を救うことさえできないのだ

こんな情けない自分に泣きそうになるが目の前の彼女が一生懸命に自分の感情を抑えて我慢しているのになぜ自分だけ泣くことができるのか

静葉

「ほら、急がないと村の人達が待っているわよ」

穰子

「そうね・・・早くいかないと迷惑がかかるね」

私はいつそ姉を置いて行くくらいならばこの場で泣き崩れたほうがいくほど楽だろうかと思うが、そんなことをしては村の人達に迷惑がかかる。なにより、姉に迷惑をかけてしまう

穰子

「それじゃあ、行ってくるわね」

静葉

「ええ、楽しんでらっしゃい」

そう別れのあいさつを交わすと穰子は行ってしまった

静葉

「楽しんでらっしゃいか・・・」

自分で言っておきながらなんとも可笑しい言葉だ

自分の言葉で妹を傷つけていることを知りながら楽しんでらっしゃいとは言えたものだ――

いつ頃からだろうか自分と妹は違う存在なのだと諦めたのは

彼女は人に恩恵をもたらすことができる。だが、自分はどうかだろう出来る事といえば夏の青葉を紅葉へと変えそれを散らすくらいである最初は人々から感謝される妹を憎くも思った。だが、次第に諦めがついた・・・

陳腐な言葉だとは思うがこれが運命なのだ

神でさえ運命には勝てないのかもしれない

静葉

「そう・・・これは仕方のないこと・・・」

そう呟くと次第に目から涙が溢れてきた

この涙が自分が情けなくて出ているのかこの言いようのない寂しさのせいかな、自分にもわからなかった――

穰子

「皆楽しそうね・・・」

あれから急いで行ったかいもあってか収穫祭が始まる前に無事村に着くことが出来た

村人たちから感謝の言葉をたくさんもらった

彼らが感謝してるのはよく伝わってきた

だが、私は姉に褒められる方が何倍も嬉しかった

こんなことを考えるのは神としてはどうなのかとも思う

そんなことを考えてるうちにも祭りはどんどんヒートアップしていく

皆楽しそうに笑っている

そんな中で私はひどく不釣合で私の顔は暗く沈んでいた

穰子

「いつものことよね・・・」

そう、いつものこと収穫祭に姉が来ないのわ

だから今年も誘った

そして断られた

いつもどおり何ら変わったことはない

毎年のこのやりとりにも慣れた

穰子

「それなのに・・・」

それなのにどうしてこんなに悲しいのだろう

どうして涙が止まらないのだろう

この涙がの理由が自分の不甲斐なさか、それともいつも隣にいてくれる姉がいなかったのか今の私にはわからなかった――

今日も幻想郷は綺麗な紅葉で包まれどこからか人々の賑やかな声が聞こえてきた――

## （後書き）

はい、終わりました

なんか最後これでいいのかなって感じですけど作者はこれでいいのだ！っと勝手に納得しておきます

作者の中ではこの姉妹はとても仲がいいのです

個人的なことですが作者は風神録が好きです

キャラと曲がここまで好きになった作品も珍しいです

続きは書きませんが作者はきつとのいつか二人で行けると信じてます

秋の短編祭り実施中ですので書いて欲しいキャラ（東方限定）など

いたら感想でお願いします

作者の出来る限りの範囲でやらさせていただきます

ついでに、こんな奇特な祭りに参加してやるぞって言う方がいればどうぞ言ってください

作者が喜びのダンスと共に活動報告の協賛者欄に追加します

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9901n/>

---

ある秋の神様

2010年10月9日10時38分発行